

中山道六十九次「てくてく旅」 美濃路編

本部 北沢三明

江戸日本橋から京都三条大橋まで六十九宿(百三十五里二十四町八間：約532km)。この中山道の四分の一相当(約128km)が美濃の国、つまり岐阜県です。

落合宿(4.5) 中津川宿(3.9) 大井宿(9.8) オオクテ宿(13.7) 細久手宿(5.9) 御高宿(11.8) 伏見宿(4.8) 太田宿(7.8) 鵜沼宿(7.8) 加納宿(16.7) 河渡宿(5.9) 美江寺宿(4.7) 赤坂宿(8.7) 垂井宿(5.2) 関が原宿(5.4) 今須宿。()内は宿場間の距離でkmです。

十六の宿場を持つ美濃中山道は山間を巡る道程で、木々や渓谷が四季折々の自然の美しさのある街道です。中でも、当時の景観を比較的残しているのが、中津川宿、太田宿間でした。この区間は街並み、道幅など全体的に往時の面影を残しており、また未舗装の区間もかなり残っていました。文化庁の道整備事業で補修され、西行塚、楨

ヶ根の一里塚、みだれ坂、権現山の一里塚は当時の中仙道をそのままの状態で見守られていました。ここは東海自然歩道とほぼ同じコースを辿り十三峠という難所があり、歩き応えがありました。

美濃では中山道から少し外れますが、木下藤吉郎が美濃(斉藤竜興の岐阜城)攻めの拠点として築いた、歴史に残る一夜城“墨俣城跡”と歴史資料館をみました。

織田信長は長良川や犀川等が合流し、洲の股の形になつている墨俣を美濃攻めの砦の地に選んだ。しかし、敵地にあるため、妨害する敵を防ぎながら資材を運び、短期間に築城しなければならぬ難工事だった。

総大将を命ぜられた藤吉郎は、このあたりの地形に詳しい蜂須賀小六ら近郷の野伏たちを駆り集め、長良川の上流から資材を筏にくんで流し、あつという間に砦を築き上げてしまったという。実をいうと現在ある城は、竹下内閣が“ふるさと創生資金”として全国の市町村に一億円を配布した折、墨俣町は平成三年、この一億円を基に築城したとのことである。

次に、皇女和宮に纏わる句碑が多く見ら

れました。小簾紅園は和宮が呂久川を御座船でお渡りの祭、対岸の紅葉を一枝お望みになり、これを舷にお立てになり玉簾の中からご覧になつて「おちてゆく 身を知りながら もみじ葉のひとなつかしく こがれこそすれ」とお詠みになられたのを記念して造られた。

一呑の清水は文久元年(1861年)、將軍家茂へ降嫁のために京都から江戸に下向する途中、この水を飲まれたが、その後、



江戸から上京される折、多治見の永保寺にこの清水を取り寄せて点茶されたといわれ

ている。

美濃の国歩き最後の道程には、桃配り山、東首塚、家康最後の陣地（中央部には御床机場とよばれた首実験場）など、やはり関が原の戦いの遺跡が随所にありました。徳川家康は桃配り山を最初の陣地と定め、九月十五日の午前三時頃、岡山の本陣を出発して関が原へと向かい、この丘陵地で采配を振った。桃配り山の名の由来は、今から300年前、壬申の乱の時、野上の行宮に入られた大海人皇子を慰める為、村人達は桃を献上した。皇子は魔よけの桃として、兵士全員にこの桃を配ったところ、吉野軍の士気が大いにあがり勝利したと言う伝説による。

次に関が原の戦いについて簡単に触れてみます。慶長五年（西暦1600年）九月十五日、霧が晴れた午前八時すぎに決戦の火蓋が切られた。一進一退の攻防が続き勝敗は正午になっても決せず、焦った家康は内応の約束のある小早川秀秋を動かす為、秀秋が在陣する松尾山に向かって鉄砲を一斉射撃した。切羽詰まった秀秋は西軍に向かって攻撃をするよう全軍に指令を出し



大谷吉継隊に攻めかかった。大谷隊はよく戦ったが、脇坂ら四隊の寝返りにより防ぎきれず自害した。また、石田三成隊はよく東軍の攻撃を防いで戦ったが、小西隊、宇喜多隊の敗走の後ついに潰滅し、三成は伊吹山に逃走した。こうして午後2時には天下分け目の戦いは東軍の勝利で終わったのである。「中仙道の旅」は関が原を抜けると、いよいよ近江の国に入ります。今回は、近江から終点の京都三条になります。

小早川秀秋 (1582～1602)

豊臣秀吉の正室の兄の子。1602年にこの人が死ぬと同時に家は断絶してしまった。はじめは秀吉の養子で「羽柴秀俊」と名乗っていたが、1593年小早川隆景の養子となった。仮にも一時は親子をやっていたにも関わらず、1600年の関ヶ原の戦いで東軍（徳川方）に寝返り、東軍勝利に一役買った。しかしながら「一度寝返った人物」であるが故に信用を得られず、あんまり恩賞はもらえなかった。決死の想いで寝返ったのに、残念だったね。



相田みつを著

「にんげんだもの」文化出版局刊より

© 相田みつを美術館

<http://www.mitsuo.co.jp>